

SAYURI

2005(平成17)年12月6日鑑賞(試写会・梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝ロブ・マーシャル／出演＝^{チャン・ツイイー}章子怡／^{ミッシェル・ヨー}渡辺謙／^{コシ・リー}楊紫瓊／役所広司／工藤夕貴／^{コシ・リー}鞆俐／桃井かおり／大後寿々花（ブエナ ビスタ インターナショナル（ジャパン）、松竹配給／2005年アメリカ映画／146分）

第1章

見逃した人は必読！

……12月10日に日米同時公開されるこの映画は、スティーブン・スピルバーグ製作のもと、ロブ・マーシャル監督など『シカゴ』（02年）のスタッフを再結集した米・中・日友好（？）のエポック・メイキング的な話題作。舞台は日本。その主人公は日本情緒豊かな「芸者」さゆり。ところがそれを演ずるのは^{チャン・ツイイー}章子怡で、^{コシ・リー}鞆俐、^{ミッシェル・ヨー}楊紫瓊という3人の中国美女が揃い踏み！ その客となる男は渡辺謙、役所広司だが、ただ一人間に入る芸者として、国際派女優の工藤夕貴も登場。そして、語られるセリフがすべて国際標準として（？）の英語というのが驚き。アメリカで「Geisha（ゲイシャ）」ブームが沸きおこっているとの新聞記事もあるが、果たしてその実態は……？ この映画がアカデミー賞の一部門でも獲得すれば、今後こういうゴチャマゼ映画が国際的スタンダードになるかも……？ なお、さゆりの少女時代を熱演した大後寿々花への拍手を忘れずに……。



「Geisha（ゲイシャ）」ブームに沸くアメリカ……？

平成17年11月25日付産経新聞は「ゲイシャ・ブーム米女性に再燃」「映画『SAYURI』火付け」という見出しで、「米国が『Geisha（ゲイシャ）』ブームに沸いている」と報じている。「男性があこがれたゲイシャ・ガールの時代を経て、いまは米国の女性をとりこにしている」とのことだ。

ゲイシャ・ブームに火をつけた商品は、化粧品、カジュアル衣料から紅茶、人形まで幅広いもの。そして「ハリウッド関係者は『ゲイシャ・ブームは映画公開

後、本格化するだろう。オリエンタル（東洋風）な美しさが大ブームになるかもしれない』と予想しているが、さてその予想は……？

中国の三大美人女優の揃い踏み

この映画の見どころは、何とんでもなく^{チャン・ツイイー}章子怡、^{ゴン・リー}鞏俐、^{ミシェル・ヨー}楊紫瓊という中国の三大美人女優の揃い踏み。中国を代表する、先輩格の大女優である^{ゴン・リー}鞏俐と若手代表で今や世界に通用する大女優となった^{チャン・ツイイー}章子怡の2人だけでもすごいのに、もう1人先輩格の^{ミシェル・ヨー}楊紫瓊までが出演するというのだから、さすがハリウッド映画はすごい。

押さえておくべき前提要件

『キネマ旬報』12月下旬号は『SAYURI』を巻頭特集で組んでいるが、これを詳しく読むと次の重大な2つのことがわかる。

第1は、この映画はもともとステイブン・スピルバーグが監督するはずだったが、スピルバーグ監督は製作に退き、ロブ・マーシャル監督にバトンタッチしたこと。

第2はスピルバーグ監督はもともと「さゆり役」にニューヨーク在住の日本人ダンサー、リカ・オカモトを選んでいて、マーシャルに代わった後にダンス力を重視したマーシャル監督は、北京舞蹈大学付属中学に入学し、ダンスの世界で将来を嘱望された経歴をもつ中国人女優の^{チャン・ツイイー}章子怡を抜擢したとのこと。

原作は……？

この映画の原作はアーサー・ゴールデンの『Memoirs of a Geisha』（邦題『さゆり』）とのことだが、もちろん私はこの本は聞いたことも読んだこともないもの。日本人の私たちでも花街の世界や芸者の世界は断片的にしか知らないのに、なぜ、アメリカ人の作家がこのような数奇な運命に委ねられることになった、「さゆり」という芸者の物語を書くことになったのだろうか？

それを知るためにはもっと深く学習しなければならないが、とりあえずはこの程度の理解でとどめておこう。

島国ニッポンからの脱却は……？

すでにプロ野球の世界では、イチロー、松井秀喜と、アメリカ大リーグのトップに対抗できる日本人選手が誕生しているが、その先頭を切ったのは何といっても野茂英雄投手。

ゴルフでは世界の青木そして、サッカーでも中田英寿や小野伸二など、海外で大活躍している日本人選手が生まれている。

また、クラシック音楽では指揮の分野における世界の小澤をはじめ、ピアノの中村紘子、バイオリンの五嶋みどり、千住真理子など世界で活躍している日本人は多い。

しかし、こと映画の世界では、ハリウッドに本拠地を置いて活躍している日本人俳優はまだ少ない。ひと昔前は三船敏郎や石原裕次郎が世界的に通用する俳優だったが、最近、やっと『ラストサムライ』における渡辺謙や小雪が世界的に通用する俳優となってきた。しかし、英語のセリフを自由に喋るのは、「まだ10年早いヨ」という感じが否定できない……。ところが、この映画では……？

日本人俳優が日本語のセリフをやめて英語のセリフを自由に喋ることが、島国ニッポンからの脱却に大きく寄与することはまちがいないと思うのだが、さて、その功罪は……？

やはり英語は国際標準……？

言葉は国の存在を考えるうえでもっとも根幹となるもの。かつて日本が大東亜共栄圏を唱えていた時は、韓国でも台湾でも日本語の使用を強制したことがあった。そして今は膨張著しい中国がチベットや新疆ウイグルなどの自治区での北京語教育に熱心らしい……。しかして、その意図するところは……？

他方、日本人の英語オンチは昔からだ、中国でも韓国でも最近力を入れているのが英語能力とりわけその会話能力。アメリカとの対抗意識を次第に顕著にしている中国においても、やはりまずは英語が国際標準と位置づけているのだろうか……？ もっとも、これは、『敵を知り己を知れば百戦危うからず』という孫子の教えに沿った戦略かもしれないが……？

アメリカ人に理解できるの……？

『パールハーバー』（01年）に描かれた、日本海軍の姿は、旗さしものが林立する作戦本部で、プールに船を浮かべて作戦を練っているというひどいものだったが、所詮アメリカ人の日本への理解はこの程度のもの……？ 1945年8月15日の敗戦後も日本のイメージは「ハラ切り」「フジヤマ」「芸者ガール」というもの……？ 日本の「芸者」というものが神秘的で魅力的な存在であることはわからないではないが、それが、あまりに興味本位に描かれると日本人としてはつい反発も……。それはともかく、この映画はかなり正確に芸者の世界を表現しているが、それを観るアメリカ人の観客は果たしてどこまでその意味を理解できるのだろうか、かなりギモン……。そもそも主役の章子^{チャン・ツイイー}怡はじめ、三大中国人美女とおカボを演じた日本人美女工藤夕貴の国籍の違い自体がわからないのでは……？

米・中・日の友好推進に最適！

戦後60年という記念すべき年となった2005年、日中関係は最悪。しかし米中関係は10月の胡錦濤国家主席の訪米そして11月のブッシュ大統領の訪中とかなり改善し、急接近中……。もっともこれは建て前上のことで、アメリカ国防総省の「中国軍事力」報告に見られるように、アメリカが中国の軍事大国化、とりわけ、その海軍力の増強をかなり警戒していることは明らか。しかし、そんな中、ハリウッド映画が日本を舞台とし、芸者を主人公とした映画を企画したうえ、その主役に中国人を抜擢し、日本人俳優も多数起用し、その全員に英語のセリフを喋らせるというのは映画という芸術文化を通じた米・中・日の友好推進に大きな役割を果たすことは明らか……。

アカデミー賞獲得の可能性は……？

12月10日の日米同時公開に先立って上映されたこの日のマスコミ関係者用試写会のアナウンスでは、この『SAYURI』はアカデミー賞候補の呼び声が高いとのことだった。このアナウンスにどれ程の根拠があるのかわからないが、私の見立

てでは、この作品は何らかのアカデミー賞を1つくらい獲る可能性は十分あるのでは……？ 章子怡^{チャン・ツイイー}が主演女優賞にノミネートされたり、万一最優秀主演女優賞でも受賞すればものすごいことだが、その確率はかなり低いもの。もっともそれは、ひとえに投票権を持っているアメリカ人男性が彼女をどの程度好ましいと思うかにかかっているはず……。

私はひそかに『イン・ハー・シューズ』（05年）のキャメロン・ディアスにその可能性があるのではと思っているが、さてその結果は……？ また、この映画の映像の美しさは特筆モノだから、色彩賞など、映画製作の技術的な分野で何らかのアカデミー賞を獲得する可能性も……。もし、この『SAYURI』が1つでもアカデミー賞にノミネートされたり獲得すれば、その意義は何といっても米・中・日の「合体」にある。そうなれば、今後は日本を舞台とした日本のテーマで、日本人俳優が英語のセリフを喋るという映画が一気に増えてくるかも……。そしてこれは、「日本映画の国際化」という大きなテーマにおいて、画期的な第一歩になるはずだが……。



チャン・ツイイー 章子怡が芸者の役を演ずるのは国辱か？

産経新聞の中国報道の面白さは五大紙（朝日・毎日・読売・産経・日経）の中で際立っているが、2005年11月19日付産経新聞朝刊は『『憤青』さまよえる愛国青年』と題して、「2005年4月の反日デモで中核的役割を果たした『憤青（怒れる若者）』と呼ばれる愛国民族主義青年のアイデンティティーが揺らいでいる」と報じている。興味深いのはその中で、「またハリウッド映画『SAYURI』で芸者を演じた中国人女優章子怡^{チャン・ツイイー}を国辱と騒ぎ始めた憤青に対しては中国新聞週刊誌などが『日本文化への無知』と批判した」と書かれていること。つまり、旭日旗ファッションで女優・趙薇^{ヴィッキー・チャオ}が大バッシングされた2001年のころとメディアの立ち位置は大きく変わったというわけだ。

2001年ごろ章子怡^{チャン・ツイイー}が芸者の姿で渡辺謙扮する「会長さん」にひたすら尽くそうとしていたら、まさに国辱とみなされて大問題となり、彼女は大バッシングされていたかも……。そう考えると、やはり中国では彼女を始め、国際スターとなった女優たちもどんな作品にどんなスタンスで出演するかを慎重に見極めなけ

れば……？

タイムリーな結婚発表

『SAYURI』を私が観たのは12月7日だが、それに合わせたかのように翌12月8日の新聞各紙に渡辺謙の結婚が報じられた。そのお相手は南果歩さん（41歳）。『ラストサムライ』に続いてこの『SAYURI』への出演で国際派スターとしての地歩をより強く固めながらも、他方ではしっかりと女性遍歴（？）の方は続けていたというわけだ。ともに再婚同士だが、さて、「互いに荒波を越えてまいりましたが、今、穏やかで豊かな時をむかえることができました」とのコメントどおり、うまくいくのかナ……？

2005(平成17)年12月8日記

第1章

見逃した人は必読！

「男たちの大和」観て熱く語れ

戦後60年という節目の今年、9・11総選挙を圧勝し結党50周年を迎えた自民党は、新憲法草案を提示し、9条の戦争放棄は維持するものの、「自衛軍」の海外活動を容認する議論が本格化した。そんな「55年体制」から「05年体制」への移行が顕著となった今年のラストを飾って『男たちの大和／＼YAMATO』が12／17公開される。

吉田満著『戦艦大和ノ最期』は、乗組員の目から観的・リアルに世界最大の不沈戦艦大和の最期を描いた小説だが、辺見じゅん原作のこの映画は、20歳前後の若者たちを主人公に据えた青春群像劇。

大和の竣工は真珠湾奇襲攻撃直後の12／16だが、その時既に大艦巨砲主義は時代遅れとなり、大和の存在

価値・活躍場所は失われていた。大和へのあこがれを抱いて厳しい訓練に耐えてきた若者たちは、上層部が決定した沖縄への水上特攻「作戦」をどのように受け



とめたのだろうか？

6億円をかけて建造し、「日本が再び戦艦大和を建造！」と中国で報道された（？）、艦首から艦橋部分まで190m、2／3の原寸大セットがこの映画の1つの売り。また、1／10の模型を展示した呉市の「大和

ミュージアム」も大人気でその見学者は100万人を突破した。1000万人動員を豪語した角川春樹プロデューサーは、製作費20億円に対し売上100億円を目指しており、長瀬剛が歌う主題歌もラブソングの名曲だが、果たして若者たちの反応は……？

戦局の解説を最小限にとどめ、反町隆史・中村獅童・松山ケンイチらを中心としてスクリーン上で展開される、国と愛する家族そして生きることへの熱き想いは魅力いっぱい。大和に「ある想い」を抱く年配者だけではなく、今ドキの若者たちにごそ、今の自分の姿とダブらせながら主人公たちの生き方を感じとり、熱く真剣に語り合ってほしいものだ。

（弁護士 坂和章平）

映画

産経新聞 2005（平成17）年12月9日（本書24頁参照）